万葉集の歌語とジェンダー

大阪芸術大学　文芸学科　教授　龍本　那津子

本稿は筆者の「ことばとジェンダー」に関する研究の一環として、万葉集の歌をジェンダーの観点から考察するものである。

今回考察の対象とするのは、万葉集巻 16・3881「大野路は　繁道茂路　繁くとも　君し通はば　道は広けむ」で、この歌は「越中国の歌四首」とされた 4 首の歌群の最初に位置するものである。

この歌については、大きく分けて二通りの解釈がなされている。一つは恋歌の文脈で捉え、「通ってくる男に向けられたもの」とする考え方である。もう一つは恋歌の形式を踏まえつつ、「越中国司の到来を歓迎する」と考えるものである。これについて、先行研究を確認しつつ、ジェンダーの観点から分析を加えていきたい。

まず、当該歌を含む 4 首の歌群の本文を示す。

（原文）

越中國歌四首
大野路者　繁道森徑　之氣久登毛　君志通者
徑者廣計武　（巻 16・3881）

澁谿乃　二上山尓　鷲曽子産跡云　指羽尓毛
君之御為尓　鷲曽子生跡云　（巻 16・3882）

伊夜彦　於能礼神佐備　青雲乃　田名引日須良
霖曽保零〈一云＿「安奈尓可武佐備」〉
（巻 16・3883）

伊夜彦　神乃布本　今日良毛加　鹿乃伏良武
皮服著而　角附奈我良　（巻 16・3884）

（訓み下し）（※塙本に従う）

大野路は　繁道茂路　繁くとも　君し通はば
道は広けむ

渋谿の　二上山に　鷲そ子産むといふ
指羽にも　君がみために　鷲そ子産むといふ

弥彦　おのれ神さび　青雲の　たなびく日すら
小雨そほ降る　〈一に云ふ「あなに神さび」〉

弥彦　神の麓に　今日らもか　鹿の伏すらむ
裘着て　角つきながら

このうちの一首目が今回の考察対象である。

先に挙げた二通りの解釈は、「君」の解釈によるものである。「君」を国司に対する呼びかけとみれば、国司の到来を歓迎する歌となるし、「君」を女性から男性への呼びかけと捉えれば恋歌となる。一般に『万葉集』では、「君」は女性から男性に向けて使われ、その逆はなかったとされるのが通説である。万葉集巻 13・3761 の左注を見ても、巻 13 編集当時、すくなくとも和歌においては「君」の語に「女が男に向けて使うものである」というジェンダー性が付与されていたことがわかる。

「君」を国司と見なす説においても、元々は「恋歌」であったものを「国司賛美」のために利用した、と考えられている。ここの「君」を「国司（あるいは地方の有力者）」ととるのは、当該歌が次の 18・3882 歌

渋谿の　二上山に　鷲そ子産むといふ
指羽にも　君がみために　鷲そ子産むといふ
（巻 16・3882）

（歌意）

渋谷の二上山にも鷲が子を産むといいます。せめて翳(さしは)になりとなって、わが君のお役に立とうと、鷲が子を産むといいます。

と対をなすものと考えるからである。「越中国四歌首」が歌群として緊密な意味のつながりを持って構成されているか否かを考えるのは本論の目的ではないので深く立ち入らないが、「君」を「国司」とみなすのは「場」に依存した解釈であり、題詞や左注と行った補助的な情報がない限り確定することはできない。そもそも歌は元来それが詠まれた際の意図はさておき、別の文脈でそれがふたたび歌われた場合には全く別の意味を生成することもある。既存の恋の歌（民謡）を二次利用したか、あるいは恋歌の形式を踏まえて新たに賛美の気持ちを表したか、いずれにせよ、当該歌は「通う男と待つ女」という恋歌の発想に則って歌われていることは間違いない。

では、当該歌を恋歌として考える場合、既存の解釈に問題はないのだろうか。既存の注釈書では、当該歌は「恋の妨げに挫けそうになっている、あるいは人目を気にして通ってこない男」を、女が「励ます歌」としている。しかし筆者はこの歌は単なる「女の恋歌」ではないと考える。その理由は、この歌の上二句は「通い路の難儀を訴えて求愛する」という男の恋歌の類型を持っており、一方で下三句は「男の求愛に対して否定的に切り返す」という女の恋歌の類型を持っているからである。したがって、この歌には一首のうちに男／女のジェンダーが併存することになる。一見矛盾するようなこの歌をどのように解釈すれば良いのか。

筆者は、この歌に異なるジェンダーが併存するのは、もともとこの歌が一人の歌い手によるものではなく、男女それぞれの掛け合いから生まれたものであったからと考える。土橋寛の古代歌謡論では、平安時代の神楽歌などを参考に、万葉集の歌の中にも

（本）5・7・5
（末）（5）・7・7

あるいは

（本）5・7・（7）
（末）5・7・7

と詠まれうるものがあることが説かれている。

この 3881 歌はおそらく歌垣での男女の掛け合いから生まれたもので、上二句が通い路の難儀を訴えて求愛する男の歌、下三句はそれをはぐらかし切り返す女の歌だったのだろう。それが、どう歌われていたかは捨象されて、万葉集に採録する際に今の形に整えられたものと考えられる。